

戦争と女

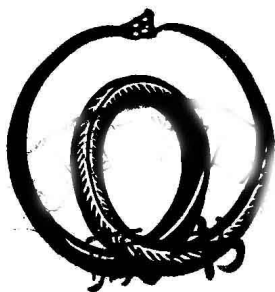
舟崎 淳



戦 争 と 女

山砲中隊長の体験記

舟 崎 淳



東 京

株式会社

第 二 書 房

1957

よな ざき あつし
舟 崎 淳

昭和14年9月、陸士卒(52期)菊兵团(第18師団)山砲小隊長として、南支翁英作戦、南寧作戦、仏印進駐作戦に参加。中隊長として、シンガポール作戦、ビルマ作戦に参加。菊兵团砲兵隊指揮班長として、フーコン作戦に参加。昭和19年3月陸軍航空通信学校附より、同年渡満、航空情報聯隊附。

昭和20年8月、航空情報隊長、少佐にて終戦。作業大隊高級副官にて入ソ。チタ州カタイ収容所、ブカチャーチャ、ベトロフスク病院、ヒロク病院、チタ第18収容所、第7収容所を経て、昭和24年3月、ハバロフスク第14収容所に移り、ホール病院を経て、昭和25年1月帰還。

現在、某要職にあり。

昭和32年2月15日 第1刷 5000部発行

著作者 舟崎 淳 刊行者 伊藤 禱一

印刷所 東京都新宿区築地町13 赤城印刷株式会社

刊行所 東京都世田谷区北沢1丁目1175

株式会社 第二書房

振替口座東京8957 電話(42)5462

定価 150円

I 広東の盲妹

1	千万長者の招待……………	9
2	膝の上の美女……………	12
3	閉ざされた眼……………	19
4	きぬぎぬの別れ……………	25
5	紅バラの誘惑……………	27
6	落ち入った罌……………	32

7 悲しき再会……………39

8 木片を抱きしめて……………46

Ⅰ 海南島の蠍娘

1 密林の中の人声……………51

2 蠍に噛まれた女……………55

3 悪魔へのいけにえ……………60

4 土民達の祈禱……………66

Ⅱ ブキテマの悲劇

1 ショール水道へ……………74

2	虚空を掴む片腕……………	77
3	地獄の土を踏む……………	84
4	燃ゆる南十字星……………	93
5	姑娘は裸にされて……………	100
6	敵兵のテントを覗く……………	104
7	鷹に追われた窮鳥……………	108
8	灼鉄の閃光は散る……………	114
9	消え去った中尉の顔……………	121
10	写真を抱く印度兵……………	129
11	破壊された愛の巢……………	133
12	首無し兵とパイ罐……………	136

13	中隊の犠牲者二名……………	142
14	シンガポールへ集結……………	148

Ⅳ ビルマ秘話

1	上等のブランディ……………	153
2	「牛首祭」競争……………	157
3	三人のビルマ娘……………	165
4	相寄る二つの魂……………	173
5	モガウンへの旅……………	181
6	死のサモア十字路……………	191

V 女ばかりの土民部落

1	雌猿に抱かれた兵隊……………	202
2	チポー王の秘薬……………	211
3	大虎と小象の決闘……………	216
4	地獄谷の脱出行……………	226
5	フーコンの魔境を後に……………	234

戦争と女

——山砲中隊長の体験記——

I 広東の盲妹

1 千万長者の招待

私はココアの入った茶碗の把手を掴んだ。

茶碗の中に浮いているココアの粉を唇に着けないように、そっと吹きやって、しずかに口を近づけた。

熱帯娘の肌は、恐らくこんな色艶をしているに違いないと思った。

そして、チヨコレート色のその流動体をゆっくりと口に含んだ。口の中が、情熱的な香りでいっぱいになった。とろけるような甘いその味にも、すぐに未だ知らぬ女の肌の味を連想した。

「一度戦闘に参加すると、こんなにも女体にあこがれるものか」

自分自身でも理解し得ないほど、私の肉体はひたすらに女体を求めてうずいている。人間の本能も満喫出来ずに死んでゆく……そんなことはもはや私には堪えられないことだ。つい最近まで

彷徨した戦場の腥さが、反動的に優美なあこがれを呼び起して、その生々しさが躍動する女体への思慕となつて、私の心を掻き捲っているのだ。

今夜こそ、この身を以て夢に描いた未知の世界を心置きなく探求してやるぞ——。

「色即是空……童貞で凱旋せよ」と、禪坊主のようなことを云つて、私を論してくれた中隊長……その厳めしい顔もよく見れば、人間臭い脂が漲っているではないか。今夜だって何処にとぐるを巻いて生臭い本能の追求に、快樂を食っているか、知れたものではない。

童貞が何だ。俺だけが人間臭さから離れていると云うのか……糞喰えだ！

私は腕時計を見た。十七時五十分過ぎ。間もなく同期の若林少尉との約束の時刻、十八時がやってくる。私達はこの十四階建の「愛群ホテル」の屋上喫茶店で落ち合つて、三浦屋へ初乗りを企てているのだ。三浦屋と云うのは将校慰安所——つまり将校専用の性的享樂所である。

私は椅子を離れた。そして、「屋上喫茶店」と日本文字の鮮かなのれんを押し分けて、ヴェランダの欄干に歩み寄つた。春風が開襟シャツの袖口から入つて、大きく胸を脹らましてくれる。左胸に安全ピンで止めてある真新しい少尉の階級章が、ハタハタと躍動していた。

眼下に広東の夕景が展開している。幅広い珠江が動んだ帯のように見える。その帯の上には、あちこちに散在する大型のジャンク船を中心に舳（はし）やかまばこ屋根の蛋民船（たんみんせん）が、恰も羽蟻の周囲に

蠢く小蟻のように、忙しく右往左往している光景が面白く眺められた。

「やあ……大分待たしたようだな」

ポンと肩を叩かれた。見れば、日焼けのした童顔が人懐っこく微笑んでいる。若林少尉だ。六尺近い偉丈夫である。

「いよう……ココア一杯分だけ待ったぜ」

「約束の時間には遅れなかった筈だぞ。ハッハッハ……。ところで、早速だが頼みがあるんだ。今夜の予定を変更してくれないか」

「えッ！……それは又何故だい？ 別の当てでもあるのかい？」

私は聊か拍子抜けがして、不服そうに訊ねた。

「うん、三浦屋は次回にしよう……」

「おいおい……がっかりさせるなよ」

「いや、実はな、俺の隊の駐屯している七里村の千万長者が、是非俺と貴様を招待したいと云ってるんだ。尤もこれには訳があるんだ。……が、兎に角今夜一緒に来てくれないか？」

千万長者の招待宴には好奇心も惹かれはしたが、実のところ心に秘めた期待を外されて、がっかりせざるを得なかった。

「そうだな。貴様が行くのなら仕方がない……お伴するよ」

「まあ兩人きりの痛飲三斗の機会は、今後幾らでもつくれるのだからな。彼は本格的広東料理を御馳走すると云ってるんだ。何処に連れられていくか知らないが、これも亦思ひ出になるさ」

若林少尉は、そう云うと、後を振り向いて、手招きをした。

すると、屋上喫茶店の蔭から三人の支那服を着た男が、慇懃な物腰で近付いてきた。

先頭に進んで来る立派な服装をした白鬚の老人を指して、若林少尉が囁いた。

「あれが千万長者だよ。後の二人は秘書と台湾人の通訳だ。四人一緒に七里村から自家用車でふつとばして来たが、別に一台拾ってホテルの入口に待たしてある」

三人の支那服の男は、私の前まで来ると、丁寧に手を組んで頭を下げた。

白鬚の老人が、重々しい口調の広東語で話しかけた。すぐに台湾人の通訳が進み出て、たどたどしい日本語で説明する。

「大人（あなた）と今夕誼を通じ得ますことを光榮に存じます」

2 膝の上の美女

既に辺りは夕闇に包まれていた。

どの位走っただろうか——前方を走っていた乗用車が静かに停り、つづいて私達の車がギーッと、かすかな音を立てて停った。

眼の前に聳え立つ三階建の洋館の中央には、「銀竜酒店」と大きく浮き出した真紅のネオンが、眩ゆく輝いていた。

前方の車から降り立った三人の支那服の男は、その入口から慣れなれしく入って行く。

若林少尉と私とは、その後から続いた。

鍵形の組み合わせ模様が縁どつてあるモザイク硝子の扉を押し開けて、一歩中へ足を踏み入れると、むっと蒸せ返るような臭気が鼻を衝いた。

そこは広間になっている。

数多いテーブルが散在していて、大抵のテーブルには、数人の広東人達が寄り集り、ガヤガヤ話し合いながら酒を呑んでいた。勿論、日本人立入禁止の店だ。

一瞬、皆の眼が一齐に私達に集中した。

しかし、連れに広東人のあるのを知って、再び従前通りに酒を呑み出した。

何とも云えぬ無気味さを私は感じたが、何喰わぬ顔をして一行に続いた。

私達は、その広間の片隅にある扉を押し開けて、更に奥へと進んだ。

仄暗い細い通路を二三回右左に折れると、二階に通ずる屈折階段があった。

二階も鈍い光に照らし出された狭い通路が走っていたが、その両側には、緞子のカーテンが降りている個室が、ずらりと隣接していた。

カーテンは、真中から割れて左右に開くようになっていた。

私は一行の後に随いながら、ふと個室の内部を覗いて見たい好奇心に襲われた。それで、金襴の刺繍を鮮かに凝らした一つのカーテンを、そっと細眼に開いて見た。

途端、私はあっと危うく驚きの声を挙げかけたが、やっと息をつめて声を殺したのだった。

個室の内部にはバラ色の光が漂い、その部屋の奥には、黒檀造りと思われる豪華な寝台が設けられていたが、その寝台の端に今しも一人の素裸の老人が腰を掛けて、一糸も纏はぬ若い裸女を右手で抱くようにして、横向きに膝の上に乗せているではないか。

しかも老人は、左手で銀造りと思われる長い竜型のパイプを支え、その先端を口に咥え込み、時々ぱくぱくと唇を震わせながら、恍惚とした表情で眼を閉じているのだ。

老人の胸に顔を埋めた裸女の肌は、艶々とバラ色に映え、天女のような印象を私の眼底に烙きつけた。